

ルカによる福音書11章 1-28 節 「聖霊の働き」

1A 熱心な祈り 1-13

1B 祈りの模範 1-4

2B しつこく求める者 5-13

2A 霊の戦い 14-28

1B 神の指による追い出し 14-26

2B 幸いな人 27-28

本文

ルカによる福音書 11 章を開いてください。私たちは、イエス様がエルサレムに向かう旅の中で起こっていることを読んでいっています。そこで、イエスさまにつながることの必要性がこれとなく強調されてきました。イエス様について行きたいなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、それについて来なさい、というものでした。自分という障害を乗り越えて、イエス様と共にいる、イエス様にひっついていくことの必要性を見てきました。

それは例えば、悪霊を追い出しても、それで喜ぶのではなく、自分の救われていること、天に自分の名が記されていることを喜びなさいということです。そして、私たちが単純に、隣人を親切にしようとする自分の善意では決して、神の御心を行えないということ、ユダヤ人の嫌いなサマリヤ人の良い行いを通して、イエス様は示されました。自分たちには決してできないという、無力を認め、そしてその良きサマリヤ人こそが実はイエスご自身のみができる憐れみの業なのだということを知って、イエス様に抛りすぎるのです。そして最後は、マルタとマリヤの家での話を見ました。自分たちの奉仕でさえ、主につながっていることの妨げになることもあることを知りました。マリヤのように、どんなことがあってもイエス様の前にひざまずき、そして御言葉を聞くという決心をしなければいけません。そこでイエス様の次の話が始まります。

1A 熱心な祈り 1-13

1B 祈りの模範 1-4

11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

イエス様が祈られています。ルカによる福音書は、イエス様が父なる神に祈られている場面を何度となく書いています。それは、イエス様は私たちに、父なる神につながっていることの重要性を教えておられるからです。私たちがイエス様につながっている以上に、イエス様が父なる神に祈りによってつながっておられた。その祈りにおいて、私たちもイエス様につながるのです。

弟子たちは、イエス様がこのように祈っておられるところに行って、その姿を見てもっと祈らなければいけないと思ったのでしょう。彼らはイエス様が祈り終わるのを待ってなければいけません。どのように祈らなければいけないのかを、彼らのほうから尋ねました。かつてバプテスマのヨハネが教えていたようです。そしてここで気をつけなければいけないのは、「私たちにも」と尋ねていることです。弟子が個人として祈るよりも、弟子たちの集まりとして、共に心を合わせて祈る時にどうすればよいかという祈りを求めています。

11:2 そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。11:3 私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。11:4 私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちを試みに会わせないでください。』」

祈りを教えられています。私たちはもう一度、祈りに必要なことをここから襲われた意図思います。初めに、呼びかけと礼拝です。「『父よ。御名があがめられますように。』」であります。神が誰であるかをはっきりさせ、それから御名があがめられるようにと礼拝を捧げます。それから「御国が来ますように。」であります。その方の考えておられること、願っておられること、計画されていることが実現するように願います。自分の願いや考えよりも、信頼する父が願っておられること、考えておられることが実現することを願うのです。

そして嘆願をします。「私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。」私たちは、当時のイスラエルで多くの人がとても貧しかったことを思い出さないといけません。日々の食べ物に事欠くことがありました。そして、信仰に富んだ生活をする人は物質的には貧しくなることがあります。したがって、このことが切実な祈りとなりますし、神は決して私たち信仰者を乏しくさせることはないことを教えておられます。

そして、「私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。」であります。私たちの罪が赦されることは、信仰生活にとって欠かすことのできないものです。そして、私たちが赦しの心をもって生きることが必要です。罪赦された者として、他者に対しても神の赦しの中に生きます。最後に、「私たちを試みに会わせないでください。」であります。神の国が入ってきたことを、イエス様はこれまでも話されていましたが、それゆえ悪魔からの試みが強くなります。使徒ヨハネは、「わたしたちは神からの者であり、全世界は、悪い者の支配下にあることを知っています。(1ヨハネ 5:19)」と言いました。

2B しつこく求める者 5-13

そしてイエス様は、「日ごとの糧を毎日お与えください。」と祈りなさいと言われましたが、このことを引き合いに出して、祈りをしつこく行っていくことの必要性を次に教えられます。

11:5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。11:6 友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ。』と言ったとします。11:7 すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどうをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』11:8 あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。

この場面は、現代の私たちと二つの点で行っています。一つは、当時は旅人をもてなす習慣があったことということです。今の私たちのように、コンビニでおにぎりが増えるような状況ではありません。そして強盗も外にはいますし、そのため旅人をもてなすことがどんなことにも増して大切にならなければいけないという習慣ができていました。けれども、今、その食べ物さえありません。もう一つは、家が一つの部屋しかないことです。貧しいところであれば、洞窟が家になっていました。そして、一人が起きて動けば、その寝ているところをまたいで歩かねばならず、必ず全員を起こしてしまうことになります。

しかし大事なのは、それでも「あくまで頼み続けるなら」必要な物を与える、ということです。ここは、「厚かましさをゆえに」とも訳せる言葉です。

11:9 わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。11:10 だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

神に対しての祈りの姿勢を、イエス様は教えておられます。一つは求めます、自動販売機のように神は自分に与えられるというものではありません。そして求めても与えられないように見えても、捜すのです。そして捜しても見いだされないように見えても、叩くのです。必ずその過程の中で、神は答えてくださいます。ここで大事なのは、すでに主が弟子たちに、模範の祈りを示しておられることです。これは御名をあがめるためのものであり、御国が来るようにという祈りのためのものです。自分中心の祈りは、叶えられないということです。「願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。(ヤコブ 4:3)」御国ではなく、世への愛があるならば、その祈りは聞かれませんが、しかし、そうでないなら主は惜しみなく与えてくださいます。

この熱心な祈りは、他の箇所でも奨励されています。「義人の祈りは働く、大きな力があります。エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。(ヤコブ 5:16-17)」エリヤは熱心な祈りを捧げました。地中海に雲がでていないかを、若い者に確かめさせましたが七度それを行ないました。七度目に、わずかに雲が出てきたのです。それで大雨が降ると彼は預言しました。このように、しつこいように祈り求めるのです。そ

の過程によって、私たちは自分たちに力がないことをしり、神のみの拠り頼むことを知り、それで神の力が現されるのです。

11:11 あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。11:12 卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。11:13 してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう。」

ここで大事な言葉は、「してみると」というものです。肉の父親でさえ、子に対してこんな意地悪なことはしない。ましてや、天の父は良い物を与えない訳がないということです。英語では、how much more ということです。

そしてルカが、同じ著者が使徒の働きを書いていることを思い出してください。「聖霊をくださらないことがありましょう。」と言っています。聖霊の満たし、聖霊のバプテスマはこのようにして願い、祈り求めることによって与えられます。日毎の糧をお与えください、という言葉は、日々事欠くかもしれない食糧を与えてくださいという切実なものです。同じように霊的に、切実なこととして祈り求める人に、主は聖霊の力をもって臨んでくださいます。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。(使徒 1:8)」

さらにここで重要な点は、祈りの主体が「私たち」となっていて、イエス様も「あなたがた」と言い続けていたことです。個々人が聖霊を求めるのはさることながら、心を合わせて共に祈っていく中で、聖霊が与えられるという約束なのです。今、個人主義が発達して自分が満たされる、自分が高揚して高められる、自分が、自分がという自己愛の文化で充滿しています。それに対抗するのが、キリストの弟子たちが自分を捨てて、共に愛によって結びつき、そして心をつにして祈っていくという祈り求めであります。

これを弟子たちは、実行しました。「そこで、彼らはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムの近くにあつて、安息日の道のりほどの距離であつた。彼らは町にはいると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであつた。この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。(使徒 1:12-14)」そして、五旬節が満ちたころに約束が成就したのです。「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のこと

ばで話しました。(1-4 節)」ですから、共に祈っていき聖霊を求めていきましょう。

2A 霊の戦い 14-28

そして次に、イエス様が聖霊の力によって宣教の働きをしている中で、この地上で展開していたことを明らかにされます。

1B 神の指による追い出し 14-26

11:14 イエスは悪霊、それもおしの悪霊を追い出しておられた。悪霊が出て行くと、おしがものを言い始めたので、群衆は驚いた。11:15 しかし、彼らのうちには、「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」と言う者もいた。11:16 また、イエスをためそうとして、彼に天からのしるしを求める者もいた。

イエス様が、宣教の働きを始められる時に、悪霊追い出しから始まったことを思い出してください。その前に、バプテスマを受けられた時に聖霊が臨まれ、そのまま御霊によってサタン誘惑を受けられたところから始まりました。イエスの御教えと、それにとまなう權威によって神の国の現われ、神の支配の領域が現われることが分かりました。ここでは、おしの悪霊とあります。イエス様がその悪霊を追い出されて、物が言えるようになったのですが、これはイザヤ書の中でメシヤが行なう業として紹介されています。「そのとき、足なえは鹿のようにとびはね、おしの舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。(イザヤ 35:6)」

そして言うてはならぬことを、言った者がいました。「悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」という言葉です。聖霊によって行われている業が、バアルの神々の一つである、ベルゼブルによって行っているのだと疑い、またそしていることです。その他の、イエスが行われていることは地における徴だから、天からの徴はないのかと試している声もあります。この天からのしるしについて、イエス様は 29 節以降でお答えになります。それは次回学びたいと思いますが、ベルゼブルの力によって行っているということについてのイエス様の言葉について見たいと思います。

11:17 しかし、イエスは、彼らの心を見抜いて言われた。「どんな国でも、内輪もめしたら荒れすたれ、家にしても、内輪で争えばつぶれます。11:18 サタンも、もし仲間割れしたのだったら、どうしてサタンの国が立ち行くことができます。それなのにあなたがたは、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出していると言います。11:19 もしもわたしが、ベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているのなら、あなたがたの仲間は、だれによって追い出すのですか。だから、あなたがたの仲間は、あなたがたをさばく人となるのです。11:20 しかし、わたしが、神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ているのです。

ここでとても大切な概念が出ています。「国」であります。そして国と国の衝突について書いてあ

ります。国やその他の共同体において、頭は一人だけでなければいけません。三位一体の神の中でさえ、第一位に父なる神がおられ、第二位に父なる神に従うキリストがおられ、第三にキリストを証する聖霊がおられるのです。三つの位格は、同質であります。このように服従することによって父なる神のみに権威があるようにしています。ですから、「みんな平等で仲良く」という考えは、あり得ません。もし権威が二つになれば、それはちょうど朝鮮半島ようになります。互いに、それぞれの部分を自分の国であると主張しています。大韓民国は中国との国境の豆満江まで、北朝鮮人民共和国では釜山までが朝鮮だと考えているのです。しかし私たちは、キリストに父なる神からの全権が任されていることを知っています。したがって、キリストに徹底的に従う弟子たちの中で、聖霊によってキリストの証人となり、そして神の国の現れがあるのです。

悪霊によって悪霊を追い出しているのであればそれは仲間割れだからありえない、というのはすぐに分かりますね。そして、ユダヤ教の者たちの中で悪霊を追い出している人たちがいました。彼らも悪霊で追い出しているのか？ということをお次にイエス様が問われています。

そして大事なのは、20 節です。「わたしが、神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ているのです。」この「神の指」というのは、イエス様は明確に出エジプト記にあります。パロによって支配されているエジプト国があります。しかし、イスラエル人は神の民です。だから、出ていかせなさいと主は命じられているのにパロは、頑固として行かせません。そこで主は、エジプトで神々と呼ばれているものに対して災いを下し、ご自分の力を現しました。ナイル川が血になりました。かえるがでてきました。地の塵をぶよに変えました。

そこでエジプトに、モーセとアロンに対抗した者たちがいました。魔術師たちです。彼らは、アロンの杖が蛇に変わったのを、自分たちも杖を蛇に変える徴を行いました。またナイル川を血に変えるのを、自分たちも水を血に変えるしるしを行いました。かえるも這い上がらせました。しかし、地の塵をぶよに変えた時に、魔術師は真似することができなかったのです。家畜や獣にぶよが付き、自分たちにも付いていたでしょうが、「これは神の指です。(出エジプト 8:19)」と言いました。神の国が、悪魔の国に攻め入り、勝利している分岐点でありました。それと同じように、イエスが地上で宣教の働きをされたその実体は、霊の戦いそのものであります。神の国が、悪魔の国に攻め入っているのです。

11:21 強い人が十分に武装して自分の家を守っているときには、その持ち物は安全です。11:22 しかし、もっと強い者が襲って来て彼に打ち勝つと、彼の頼みにしていた武具を奪い、分捕り品を分けます。

ここで大事なのは、「強い人」と「もっと強い人」の対比です。出エジプトにおいては、強い人とはパロのことでした。パロがエジプトを治めていたので、そこは安定していました。イスラエルは奴隷状態でありましたが、それでも安定していたのです。けれども、モーセがやってきたのです。モーセ

についておられるイスラエルの神は、パロに対してもっと強い者であられたのです。それで、イスラエルの民を分捕り物とし、またイスラエルの民も、エジプトの金銀を彼らから奪い取りました。それと同じように、キリストがもっと強い方であり、悪魔が強い者でした。今、イスラエルにあるものをキリストが奪い返しておられるのです。悪霊につかわれていたものを解放して神のものとしていかれました。

ですから大事なものは、表面的な奪い合いではなく、頭が誰になっているのかを見定めることなのです。実行犯を捉えても黒幕を捕まえなければ再び犯罪が起こると同じです。例えば、私はイスラム過激主義についてずっと見てきましたが、アメリカや有志連合が武力で戦っても、勝つことはできないと思いました。なぜなら、彼らの危険な思想こそが彼らを突き動かしているのであり、その危険な思想こそを、主の御言葉によってつぶすこと、そして福音の力でつぶすことしか方法がないのです。彼らが、その拠り所をなくしたら解体するしかないからです。そこで主が大事なことを語られます。

11:23 わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です。

そこで大事なものは、私たちがもっと強い方についているかどうか？なのです。私たちは、自分の周りで起こっていることを自分で処理しようとしています。そうではなく、自分自身がキリストの側についているかどうか、これをしっかりさせておかなばなりません。自分のすることは、その後で何でも調節できるのです。

そして、してはいけないことがあります。中立になることです。霊の戦いにおいて、仲介はありません。自分自身がキリストの味方になり、それで神ご自身が一人一人にご自身の力を現すことを待つことしかできないのです。私たちはキリストを司令官とした兵士たちであり、私たちが仲裁に回ってはいけないのです。私たちは人間の集まりではありません。神の共同体です。一人一人を神が取り扱われるのです。

11:24 汚れた霊が人から出て行って、水のない所をさまよいながら、休み場を捜します。一つも見つからないので、『出て来た自分の家に帰ろう。』と言います。11:25 帰って見ると、家は、掃除をしてきちんとかたづいていました。11:26 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みなはいり込んでそこに住みつくのです。そうすると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。』

悪霊を追い出してもらったのに、キリストを自分の主としないので、状態がもっと悪くなったことを話しておられます。自分がどこまでイエスを主としてあがめているのか、これが重要です。この中で初めて、悪霊の力に対して対抗できます。表面的なところで、悪を追い出そうとしても無理なの

です。キリストが自分にとって主となっていれば、徐々に徐々に、悪霊どもは自分から去っていきます。急に悪霊を追い出してもらって、スッキリしたとしても、イエスを主とする生活をしているかどうかによって、初めて安定が来るのです。

イスラエルは国民として、悪い結果を被りました。それは、イエスによってこれだけの恵みがやってきたのに、この方をキリストして受け入れなかったので紀元 90 年にローマによって神殿が破壊されました。

2B 幸いな人 27-28

11:27 イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。「あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。」11:28 しかし、イエスは言われた。「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

ルカによる福音書は女性の役割が大きく書き記されています。ここでは女が叫びました。ここはまさに、イエスの母マリヤがカトリックのというような聖母でも何でもないことを示しています。彼女幸いなのは、あくまでも他の弟子たちと同じようにイエスを主として、神の言葉を受け入れることによるのみです。

大事ですね、イエスさまは人々の賞賛や、人々の声に左右されませんでした。その言葉は確かに正しいことや良いことを話しているかもしれませんが、神の国においてそれは邪魔にさえなるときがあります。あくまでも、神の御言葉を聞いてそれにとどまるもの、この方の権威を御言葉によって従っていく者が幸せであります。このように徹頭徹尾、イエスとのつながりによって成り立っています。